



研究会「ロシア」

東郷和彦 元外務省欧亜局長

2008年4月28日

ドイツ人記者の質問に答える形で、欧亜局長として関わった「北方領土」交渉の核心について次のように答えている。

「齒舞、色丹は日本ですね。国後、択捉は、日本は“返せ”、ロシアは“返さない”と対立しているわけだから、国後、択捉をどうするかについて話をしよう。これが並行協議の発想です」。そして、それに対してプーチンは「ノー」といわず、ロシュコフはそういう考え方には理由があると言って、その協議が始まるかという接点にきたところで、それは終わってしまった、と。

© 日本記者クラブ

本日はお招きいただきまして、本当にありがとうございました。

最初に一言、ちょっと個人的なことを申し上げさせていただきたいと思います。ちょうど7年前の4月26日小泉内閣が成立しまして、私、2回にわたって田中眞紀子外務大臣にブリーフィングをいたしました。時間の関係で、田中大臣に申しあげたかったことの半分ぐらいしかお話しできませんでした。5月1日に、欧州局長をやめるという辞令が出るのが決まっておりました。それで7年前のきょうは、これだけは田中大臣に申しあげたいと思っていたことを、自宅でワープロで打っておりました。あまり長い紙を大臣に差しあげるといのはよくないので、2枚の紙に、これからの対口外交で大臣にやっていただいたことを書いて、上書きの紙をつけまして、5月1日に、欧州局長を解任する辞令をいただいたときに、秘書官に渡しました。これをいつか時間のあるときに、田中大臣に渡してください、と。7年前のことです。

しかし、その後、ご案内のようにいろんなことがありまして、ことしの初めに、日本に帰ってまいりました。

歴史と国民に対する証言：交渉記録の出版

いま、司会者の方が私の本（『北方領土交渉秘録』新潮社）について一言おっしゃってくださいなんですけれども、外務省をやめたそのときは、率直に申しあげて非常に辛い時期でした。過去はなくなった。未来の方向性もない。しかし、幸いなことにオランダという国が私を迎え入れてくれるという状況の中で、私は2冊、本を書きたいと思いました。この2冊だけはどうしても書きたいと思いました。

一つは、英語で、私が外務省で仕事をした30年を含めまして、わかりやすく、戦後の日本外交について書くこと。幸い、これはブリルというオランダの学術系出版社で出すことができました。

もう一つは、私が参加してきました対口外交というものがどういうものだったかという

ことについて、これは歴史と国民の皆さまに対して、私の思うところをどうしても書き残しておきたいと思いました。幸いにしてその本を書くことができました、去年の夏に出版できたのが、『北方領土交渉秘録』です。私の時代にやってきた対口外交というものについては、この本の中に基本的には書き込みました。そのことでもって国民の皆さまに対する最低限の責任は果たして、いま私は別の研究をやっているという状況になっております。

ただ、日本に帰ってまいりまして、もし機会があれば、この本に書き込んだことを基礎にしまして、対口外交についての私の考え方は、もう役人ではありませんから、ひとりの個人として、率直に申しあげたいとも思っておりました。

オールジャパンでの対応を

今回その機会を与えていただきました。そこで、できるだけ率直に私の考えるところを申し上げたいのですが、その前に、一点申し上げますと、日本の国内でこの問題は非常に難しい問題になりました。多分、私がこれから申しあげること、皆さまの一部の方は、そうではないのではないか、違うのではないかと思われると思います。

6年間、在外で日本をずっとみてまいりまして、強く思いましたのは、日本全体がいろんな面でいま力が落ちてきているということです。しかし、日本全体として力がある部分もある。その中で、外におりまして一番残念だったのは、日本人同士が、いま起きているいろんな問題について、国内でものすごいエネルギーでもって議論をしている。この議論は必要なんですけれども、あまりにもその議論をすることに日本人同士が力を注いでしまった結果、結局、外の関係で何が起きているかということがわからなくなっている。

日本人同士の議論というものは、当然しなくてはいけないし、それぞれの立場を率直にいわなくてはいけないのだけれども、余りにもそこに力が行ってしまう。そろそろもう少しオールジャパンとして力を集めて、外の問

題に対峙するような、そういうようなことができないかなと思って日本に帰ってきました。

したがって、私がこれから申しあげる対口交渉に関する議論も、ぜひ今後、日本人全体としてコンセンサスをつくっていく、その一つの参考になればと思って申しあげたいと思いますので、よろしくをお願いします。

そういう観点から、きょうは4点、お話し申しあげます。

第一は、私が外務省でロシアについての仕事をやり終わった時点から今日までの間の7年間に、北方領土交渉というものがどうなったか、ということについての私の意見です。

第二に、なぜそうなったのか。この7年間の変化というものはなぜ起きたのか。

第三に、それでは今後、領土交渉というものを大きな方向としてどう考えていったらいいかについて申しあげてみたい。

最後に、ちょうど総理がロシア訪問から帰られた翌日にお話しすることにもなりましたので、福田内閣のもとでの領土交渉というものについても申しあげたいと思います。

1. 7年の間に領土交渉はどう変わったか

まず、この7年の間に日ロ関係、領土問題がどうなったか、ということです。この点は申しあげるのも非常につらいのですが、領土交渉は、非常に大きく後退したと思います。

2000年の交渉開始

ちょうど8年前、ただいま現在と似た状況が起きました。8年前というのは、プーチンが政権についた年で、日本は、沖縄サミットの議長国でした。私はその前の年の9月に欧亜局長になりました。政策をどういうふうに立てていいのかわからない難しい状況でありました。日本のほうからは、川奈提案を出し、ロシア側からはモスクワ提案が出てきておりました。しかし、川奈提案はロシアは受け入れない。モスクワ提案は日本が受け入れられない。他方、エリツィン大統領のいい出した2000年までに平和条約を締結す

るために最大の努力をするという大きな課題が、私たちの上にドーンと乗っかっておりました。

しかし、両方の立場に接点がみられない。どうやって、2000年までに平和条約を結ぶという課題に一つの方向性を与えられるのかということが全くみえない。その状況でエリツィン大統領が退陣されて、プーチンが大統領代行になった。これが8年前のちょうど1月でした。

エリツィンにかわってプーチンが出てきて、あと1年の時間があるということがわかったときに、交渉の手順ということに関して、非常に短時間で私ども外務省は方向性を考えました。

それは、まず日本の総理とプーチンが1回会って話し合いをして、今後の大きな方向性を考える。それから次に沖縄サミット、このときに日本の総理とプーチンが話をする。それから3番目に、エリツィン時代からの積み残しになっていたロシア大統領の公式訪問を実現する。

そこまでは普通考えるのですが、私は、もう一回、どうしてももう一回交渉する必要があると考えました。つまり、ロシアを相手にするときは、向こうの最後のポジションというのは、一番最後にしか出てこないのだから、1回の公式的な話し合いでは不十分。だから、どうしても2回話をする必要がある。1年の間に4回話をする必要がある、と思いました。そして、結果的にはイルクーツクまで5回、APECの首脳会議のときにブルネイで行った会談を加えて、5回の会談を実現することができました。

5回の会談をやって、何が起きたか。最初は日本の川奈提案、それからロシアのモスクワ提案ということで全く接点がなかったのですが、2000年9月の公式訪問でプーチン大統領は『56年宣言』を自分は認める用意がある」ということをいったわけです。ですから、この9月からイルクーツクまでの7カ月間の交渉というのは大変でした。56年宣言が有効だというのは、歯舞、色丹については引き渡

す用意がある、ということの最初の含みのある発言でした。それで国後、択捉はどうなるんだ、ということに、その7カ月間の交渉のすべての焦点が絞られたわけであります。

2001年イルクーツク首脳会談

7カ月間いろいろやっていった結果、イルクーツクで森総理のほうから、「並行協議」という提案をされた。「並行協議」という提案をしたのは、イルクーツクでありました。それ以前、そういう言い方をしたことはありません。

この森総理提案のエッセンスというのは、こうです。歯舞、色丹、これはもう日本に引き渡すということが想定されているので、歯舞、色丹については、引き渡しのやり方その他についてひとつ話をしましょう。他方、国後、択捉についてはまだ日本とロシアの間になんの合意もないので、実際に国後、択捉についてどうするつもりがあるのか、ということからまず話を始める。そういう形で国後、択捉の話をしましょうという提案でした。

で、この2つを併行して協議をし、なろうことなら歯舞、色丹についての話し合いが、国後、択捉の話し合いについての好影響を与え、国後、択捉についての話し合いが、歯舞、色丹についての話し合いに好影響を与える。そして、いかなる場合でも、日本の総理は国後、択捉を放棄するということはあり得ない。

これが森総理の発言のエッセンスでした。これに対してプーチン大統領の答えは、「承っておく」でありました。

事前のロシア側とのいろんな話し合いの中でのポイントは次の点でした。プーチン大統領が森総理の提案に対して国後、択捉についてはノーだといったらこれはことです。そうすると日本のほうは、その先に話が続きません。どう「ノー」といわせないで済むかというのが大きな焦点だったのです。「承っておく」という言い方は「ノー」ではなかった。けれども、ほんとに続くのかなという点については、私は事務方の責任者としてはいささかの不安がありました。それで欧州局長とし

ての最後の仕事として、モスクワにひとりで飛んでいきました。ロシア側の交渉相手であったロシュコフ次官に会った。私は、一つだけ、「いままでと同じようなテンポで交渉は続くのか」ということを次官に聞きました。

ロシュコフは、それに対してしばらく考えていました。そして「あなたのいったように物事が進むということについては理由がある。ただし、あなたが欧州局長をしている間はできませんよ」ということをいいました。5月1日に私が欧州局長をやめるということロシア側は知っていました。私が話したのは4月5日でした。もちろん私も自分がいる間に次のラウンドの交渉がやれるとは思っておりませんでした。しかし、7カ月間の間に、双方で領土問題を実際に動かすということを念頭に置いて、あるいはそれを腹の底にたたき込んで、そういうテンポで交渉は続くということ、当時私たちは、ほんとうに真剣に考えていました。ロシュコフ次官の発言を聞いて、私は、非常に明るい気持ちになってモスクワから帰ってきました。

したがって、先ほど申しあげた4月の30日に田中眞紀子大臣に対して書いた2枚のメモには、田中大臣のお父様の田中角栄総理大臣が1973年にモスクワで交渉を始めて以来、日本の総理、外務大臣、それから事務当局がみんな一生懸命頑張ってきて、いろいろ間違いもしたけれども、ようやくここまで来たこと、ここからどうぞ大臣の力でもって交渉を一挙に前に進めていただきたい、ということを書いたわけです。

イルクーツク首脳会談が終わって

これが7年前の状況であります。ただいま現在どうか。その交渉を動かそうという動きがあるか。私の知る限り、それはございません。私がすべてのことをいま知っているわけではありませんから、もしかしたら間違いがあるかもしれない。しかし、私の知る限り、ありません。

これは、本当に残念です。こういうことをいうと口幅ったいのですけれども、北方領土

問題というのは、私にとって外務省34年の仕事のうち半分を占めていました。単に仕事の問題ではなくて、ある意味では私の人生の一部の問題になっておりましたので、本当に残念であります。

2. 何故領土交渉は後退したか

では、なぜそうなったのか。理由は2つあると思います。

領土交渉からの日本側の撤退

1つは、領土交渉の局面において、いま申しあげたような状況になったところで、日本側が引いたということであります。多分、第二次大戦が終わってから、日本とソ連の間の領土交渉、いろんな経緯がありましたけれども、ロシア側からみて、とにかく何かやろう、実際に島を何とかしようと、これは数の問題からいけば2かもしれないけれども、とにかく実際に主権の問題に手をつけて何かやろうと、ロシアがほんとに真剣に考えたというのは5回ありました。くしくもそれぞれの期間が2年しかないのですけれども、最初は、1955年から56年。つまりロンドンにおける交渉が始まって56年の共同宣言が出るまでの2年。それから2回目が、72年から73年。データのもとで、グルムイコが72年に日本に来て、田中総理がモスクワを訪問する73年までの2年。3回目は、ソ連邦崩壊という歴史の本当に大きなドラマの中で、91年から92年。91年のソ連邦崩壊から92年の春の交渉までの時期です。それから4番目が、橋本・エリツインのクラスノヤルスクから川奈。97年から98年です。それから最後が、いま申しあげた2000年の9月から2001年の3月までの、いわゆる森・プーチン交渉。

この中でロシアがとにかく動いてきた時期が集中しているのは、やはりソ連邦の崩壊という、もう信じられないような大きな変化が起きた中で、では領土をどうするかという動きが出たときです。91年、92年という大変

動の中でロシアが動きをみせたときに、日本はそれをつかむのに失敗した。私は、一生公務員としての守秘義務は負っていますので、この時期のことについて書くことは大変苦勞しましたが、私の判断としては、この時期に一番大きな裂け目があった。けれども、それを日本はつかむのに失敗した。

それから、橋本・エリツインという中で、やっぱりエリツイン大統領が何かしたいと思ったのは事実だと思うのです。けれども、97年、98年の中でいろんなことが起きて、結局ロシアは動かなかったし、結果は出なかった。その91年、92年、それから97年、98年で、日ロ双方がなぜ動かなかったのか、なぜ失敗したのか、ということについて、日本側も、それからロシア側も、随分勉強したと思います。

ですから、2000年から2001年にかけての交渉というのは、少なくとも日ロの当局者は、事態が難しいのはなぜで、どこをほぐしていけば何か出てくるかもしれないということについて、かつてない理解を持ってやっていたのであります。ソ連邦崩壊ということによって、ロシアの中で起きた巨大な変化と、その変化の中から出てきたエネルギーですね、それが前の2回の失敗を経て最後に、プーチンという新しい大統領を経て、もう一回何かが生まれるかもしれないというところから出てきた最後のフォーマットが「並行協議」でありました。

ロシアからしてみると、やっぱり非常に長い経緯で、日本からとにかく「四だ四だ四だ四だ」といわれて、本当はやりたくない、ロシア人はやりたくない。いま、実効支配しているわけですから。しかし、それでは済まないという中で、彼らの立場で最大限譲歩だといっている「二」、これじゃ「だめだだめだ」といわれて、それでは何とか話はしてみようかと思って、テーブルの前に出てきたところで、なぜか日本のほうから引いてしまった。

おそらく、ロシア側からすれば、日本が「返せ返せ、四だ四だ」といいまくっていた状況で、日本のほうから引くということは、これは全く予想しないことであつたに違いない。

私は、すでにオランダへ移っていた時期でありましたけれども、それでも、ロシア側と一緒に交渉していた人たちは、「この機会を逃してはいかん、交渉はしなくてははいかん」ということを、ある意味では驚くべき一種の誠実さでもって日本側に伝えてきていた。しかし、その後、2002年、鈴木宗男議員と佐藤優氏の逮捕と私の退官に至るその事態の中で、そのロシア側の立場も消えました。

プーチン第二期政権下の領土交渉

それでも、その次の機会というのは、多分プーチンが再選された第2期政権、2004年以降ですね。つまり、日本側にも、これではまずいと思っていた外務省の人たちもいて、2004年の第2期政権になったら、何とかしようというシグナルを送っていた。ところが新聞報道等によると、2004年のプーチン第2期政権が出た後、日本が出したシグナルというのは、「並行協議」にのっとなって、交渉はしっかりやっけていきましょうというシグナルではなかった。

その結果、皆さまご記憶だと思いますけれども、2004年の末にプーチン大統領、ラヴロフ外務大臣のほうは、「二島こっさり」ということをマスコミを通じていい出した。言うまでもないと思いますが、イルクーツクで協議をしていたときの「56年宣言を出発点にしよう」という言い方と、「二島こっさり」という言い方の間には、天と地の差があるわけです。

56年宣言を出発点にしようという方は、歯舞、色丹は渡さざるを得ない。国後、択捉については、ある意味で、まだ何も決まっていない。だから、そのわずかな裂け目の中から、国後、択捉に向かって突っ込んでいこうというのが日本側の交渉の立場で、突っ込んでいった結果、必ず返ってくるという保証はありません。突っ込んでいった結果、場合によって国後・択捉についてはゼロになるかもしれない。しかし、これは交渉ですから、突っ込んでいって話をしない限り、絶対に答えは出てこない。

ところが、「二島こっさり」というのは、

あらかじめ答えが決まっている。国後、択捉はありませんよと、56年にフルシチョフがとった立場をもう一度プーチンが繰り返したわけです。そうすると、これは日本としてはなかなか交渉のテーブルにもつきにくい、ということにどうしてもなってしまうわけです。そういう状況が2004年の末に起きて、2005年にプーチン大統領が来たときは、コミュニケーションすら出なかった。

なぜそういう事態になったかということの一番大きな原因というのは、ようやく向こうがテーブルにつこうとしたときに、日本が引いてしまったということにあると思います。

ロシアの経済力の上昇

もう一つ、いまの交渉が動かなくなってしまったということについての原因があると思いますが、それは、この7年、あるいはプーチンが登場した後の8年間で、ロシアの国力というものがどうなったか。それに呼応して、日本はどうなったか、日本の国力がどうなったかという、この彼我の力関係の変化があります。

この8年間のロシアの変化、一言でいえば、強くなったということだと思います。では、どこが強くなったのか。

第一に、経済です。ロシアの経済がいま強くなっているということについては、石油価格が上がったということをももちろんまずいわないといけないでしょう。きのう調べてみたら、ちょうど2001年の4月の石油価格というのは、アラビアンライトで25ドルでした。いまはもちろん先物取引に引っ張られる点がありますけれども、スポット市場の価格は優に100ドルを上回っており、110ドル、更にあがっていくという状況です。もちろん石油の大輸出国であるロシアにとって、これが追い風であることは疑いがない。

石油価格が上がったということだけなのかというと、やはりそれだけだとはいい切れない。石油価格が上がって、エネルギー産業に引っ張られながら、入ってくる石油収入、あるいはエネルギー収入というものを、ロシ

アの国家組織の中で、比較的有効に使うメカニズムをつくった。ロシアの国内体制をそれなりに安定化させてきたという、プーチンの国家資本主義経済政策といいますか、そういうものもあったと思います。

エリツィン大統領の最後のときには、いわゆるエネルギー政商が、入ってくる収入を自分たちのオルガルヒの富に引き入れて、それがなかなかロシア国家の中に還流していなかったという問題があった。それを、プーチンになってからオルガルヒを排除した。特にエネルギーとの関係では、ガスプロムとロスネフチ、天然ガスと石油に関しての2大国策会社はその収入を一元的に管理して、それを国庫に、それなりに還流するというメカニズムをつくった。

そういうメカニズムのもとに国内法上、税法、年金、土地、労働、そういう法体制を整備して、それなりに安定した経済運営を行うようになった。その結果、金融危機でマイナス成長だった98年以降、99年から昨年の2007年までの平均値で、実に年率6.9%の経済成長をしている。もちろん統計のとり方などで若干の問題があるかもしれませんが、しかし、一応6.9%の経済成長と、それから外貨準備高、これは去年に至っては4,830億ドルと、本当かなという数字になってきているわけです。貿易収支も2005年以降は、1,000億ドル以上の黒を出してきている。

そういう状況の中で、最近非常におもしろいと思うのは、2020年までの戦略という、プーチンが2月8日に発表した今後の国家運営ビジョンであります。2020年という期限を立てて、ロシアの経済政策の運営ターゲットとして、イノベーション型の発展計画、ハイテク振興、という点を今後のロシアの中心に持っていこうとしている。

それからもう一つの動きは、政府系ファンドというものをロシアが動かし始めたということ。1,500億ドルのファンドをつくって、そのうちの一部分、「国民福祉年金」という名前のファンドを、外国投資に運用してくる。エリツィンからプーチンへ政権引き継ぎを始めていた当時のロシア経済を思い出すと、い

ろんな新しい動きが出てきております。もちろん、こういう動きがすべて成功すると決まっているわけではないですが。

特にエネルギーを国有化するということは、ガスプロムとロスネフチの運営において、社会主義的な、つまり従業員がいくら一生懸命頑張っても、みんな国庫に収入が入るので、ちっとも自分たちの生活は豊かにならない、という不満を引き起こすことにもなり、能率や経済効率を上げるようなエネルギー運営に一向にならないということになり得ます。それから、プーチンが打ち上げたハイテク振興というようなものが本当にロシアでうまく着地するのか。それから、一見いま安定しているといわれるけれども、低所得層のロシア人というのはまだ非常に苦しんでいる。問題はたくさんあると思います。けれども、全体としてやっぱりロシアの経済の力がついてきているということは否定しようがない。

ロシアの政治力の強化

それから2番目に政治です。国家というのはロシア語でいくつか言い方があります。多分、日本語の国に対応する言葉は「ストラナ」です。日本語の「国家」という言葉に対応するのは「ガスダルスツヴォ」だと思いますが、プーチンは出てきた当時からこのガスダルスツヴォという言葉強調していました。

ゴルバチョフは、ソ連社会を人間的な社会主義に変えていこうとした。ゴルバチョフが最後まで持っていた理念は社会主義だったと思います。エリツィンは、ゴルバチョフよりもはるかにロシア社会が持っていた全体主義を否定する。エリツィンは民主主義かといわれると、ちょっと首をひねる部分もあるのですが、しかし、エリツィンの中にあつた強烈な反全体主義というものは、最後まであつたんだらうと思います。

それに対して、その次に出てきたプーチンというのは、今度はロシアの国家性、「ガスダルスツヴォ」というものを前面に立てて、強いロシアにしようとする。これは最初からあつた傾向だと思いますけれども、この8年間

をみていると、彼はまさにそれをやった。それを成し遂げたことで、ロシア国民にとって、彼は大変人気のある指導者になったわけです。

ロシアがなぜ強くなったかという点、第一に、先ほど申しあげた経済の力です。でも、経済だけではなくて、首相としてのプーチンが、最初の半年でチェチェンのテロリストとか、反徒をたたきつぶしたというプーチンの力のイメージ、これはロシアの国民に受けたということもある。そして、彼はエリツィンの時代に、実際の政治を動かしていたオルガルヒを次々に追い落としていった。

私がモスクワに勤務していたころから、ある程度おつき合いをしていたベレゾフスキー、その他グシンスキーとか、ホドルコフスキーとか、そういう人脈は、政治の世界から排除された。

権力の中枢を変え、国内政治で力をつけていくに当たって、プーチンは、更に、3つの面で非常に成功したと思う。1つは、議会の掌握です。「統一ロシア」といういわゆる翼賛体制が現在のロシアの議会の仕切っている。私がおつき合いをしていた、エリツィン時代議会の中では相当の力を持っていた、例えば「ヤブロコ」のヤブリンスキー、民主党のガイダール、日本シンパだったザドルノフ、共産党のクプツォフとか、そういう人たちは皆消えていった。

それから、マスコミです。特にテレビ。90年代の中ごろ、私がモスクワで勤務していたときは、ロシアのテレビほどおもしろいものはなかった。世界の報道番組と較べて、まったく遜色なく当時のロシアのテレビはおもしろかった。しかし、いまはそれの影もありません。若干ラジオ、それからまだペンのほうにはいろんな言論が残っているようだけれども、テレビでは、プーチン支持の画像しか流されていない。

それから、地方です。知事を任命制にし、大統領代表という制度を入れたことで、中央の威令が地方に対して直接的に働くような制度をつくってきた。

議会、マスコミ、それから地方という基盤

をしっかりと押さえて、それで今回、メドベージェフ大統領、それからプーチン首相兼ロシア統一党首という新しい形でタンドムが発せられるわけです。

プーチン体制は「20年体制」とよくいわれます。これは8年の最初の大統領、あと4年の経過期間を経てまた8年間プーチンが大統領に戻るということを指します。そういうシナリオではないかと一時いわれましたけれど、ちょっと私にはわかりません。いま、それを考えてもあまり意味がないと思います。

大事なものは、いまの出発点です。メドベージェフとプーチンという2人のコンビで、もちろん個々の局面をとれば、緊張要因はあり得る話で、すべて安泰で、このままでいくとは限らないけれども、プーチン・メドベージェフという二人のタンドムでこれからしばらくロシアを仕切っていく。プーチンが相当の影響力を残していくということは間違いない。全体としては、安定したシステムで内政が動くということだと思います。

ロシアの外交力の活性化

最後に外交ですが、ロシアの最近の外交は本当におもしろいと思う。とにかく強くなってきている。強くなってきている結果、アメリカ、ヨーロッパとの間では緊張含みです。

(a) 対米、対欧関係

ロシアの立場に立ってみて、特にプーチン第二期政権になってから対米関係、対欧関係が難しくなってきた。ロシアから見ると、いくつかの点でアメリカなどのやり方について納得できないという部分があったと思うのです。

1つは、2004年の3月にNATOが行ったいわゆる東方拡大です。もともと98年に、最初に、ポーランド、チェコ、ハンガリーをNATOに入れたときに、ロシアと欧米との関係はぎくしゃくした。それが2004年のNATOの東方拡大で、バルト三国などが加わった。プーチン第二期政権の門出に当たって、ニガニガしい部分がまずあったと思うのです。

それから2番目はCISです。グルジアに始

まり、ウクライナ、キリギスタン、ウズベキスタンでの政交代の問題です。ロシアの目からみると、この一連の民主化の背景にアメリカがいるということになる。確かにそういう側面があったと思われれます。アメリカのNPOでウクライナで仕事をしてきた人の話を一度くわしく聞いたことがあります。もともとアメリカにはウクライナ移民という強烈なロビーがある。ウクライナの独立によって、在米ウクライナ移民の人たちは、これから自分たちが戻っていいウクライナにしようと思って燃えあがったわけです。その人たちがアメリカ的なミッションナリーな民主化精神を持ってウクライナに帰ってきたわけですから、ウクライナの政治に影響を与えないわけがない。

しかし、これはロシアの目からみると、アメリカがウクライナの国内に手を突っ込んで、反動的な政策、政権をつくろうとしている、というふうに見える面もある。そういうグル背景の下で、いま、そのウクライナとグルジアがNATOに入ろうとしているわけです。

それから、3番目に、ポーランドにおける迎撃ミサイルの配置、チェコにおけるレーダーの配置です。結局、プーチン第二期政権になってから、NATOの東方拡大、それからCISにおける変化、旧東欧におけるミサイルの配置。これらはロシアからみると、ロシアの国境に向かって、欧米がさらに武力を背景として侵食してきているようにみえていたのではないかと。そこから一つの緊張が出てきているわけです。

とりあえず米ロで「戦略枠組み宣言」をつくって、問題が破裂しないように、少なくともブッシュ、プーチンの間で、できる限り問題がコンテインされるように対応しましたけれども、この情勢は緊張含みです。

(b) 対アジア関係

ヨーロッパにおけるこうした緊張が当然ロシアをしてある程度アジアを向かせていると思います。この8年間、特に最後の4年間のプーチンロシアとアジアとの関係というのは、これもまたおもしろい。中核は中国であるこ

とはいうまでもない。そしてインドもあります。

プーチンになってから、中国とインドと毎年、必ず首脳会談をやってきた。この意味は軽くない。非常に成熟した外交関係になれば、首脳が1年に何回会うかということは、それほど大きな意味はないけれども、関係が全くない、あるいは悪い状況から、いい関係に本当に真剣に持っていかうというときに、首脳間の会談を定期的にやるということには大きな意味がある。

ロシアのこの8年間の動きをみていますと、毎年欠かさず、モスクワか、あるいは相手国の首都で、リズムカルに首脳会談をやってきた。中国とインドを相手に、一回も欠かしていない。これは我が国のロシアとの関係、我が国の中国との関係などに比べると、本当に考えさせられる点です。

中国とは2001年に善隣協力条約を結んで、2004年に領土問題を決着させて、2005年に共同演習をするというようなところに来ている。いま、中国、インド、ロシアの3国共同首脳会談をやる。それから、CISの中では、SCOという中央アジアとロシアと中国を含む多国間機構に、ロシア外交は重点を移してきています。

特に中央アジアとロシアの関係で、決定的な転換点はウズベキスタンでした。改革の波はグルジアから始まり、ウクライナ、キリギスタンに行き、これが2005年の春にウズベキスタンに来たときは、多分プーチンの対外関係の中で最も危機的な状況だった。ウズベキスタンで騒乱が起きたとき、多分ロシアの指導者の何人かは、次はモスクワかという一つの恐怖もあったのだらうと思うのです。

ところが、ウズベキスタンがよかれあしかれ、この争乱をたたきつぶした。それまで、ソ連邦が崩壊して91年からの14年間、ウズベキスタンはある意味で中央アジアにおける対ロ独立の盟主だった。これが一挙に立場をかえてロシアサイドに立ったことが、中央アジアとロシアとの関係、それからSCOにおける力関係を大幅に変えたという状況で、いまSCOは推移しているわけです。

もちろん、ロシアとアジアとの関係がすべていいということでもない。特にカギになる中国との関係では、中国の人口力、特にロシア極東部の人口減少と中国の人口圧力の問題があります。しかも、根っこの中国の成長力というのはロシアを上回っています。今度のチベットの事件をめぐる中国人の方々のいろんな反応をみても、中国の中に激しいナショナリズムがあるわけで、これがなんらかの形でロシアに向かないという保証もない。長期的にみて中国との関係がすべてうまくいくとロシア人が思っていることもないのだろうと思います。それから、インドはインドで、我が道を行くというところがあるわけです。

しかし、総じて経済、内政、外交を通じて、ロシアがこの8年間、ぐーっと出てきているという感は否めない。

日ロの力関係の比較

では、我が日本はどうか。この8年間というのは、小泉、安倍、福田時代でありました。私の理解でいえば、少なくとも小泉総理が出てこられて不良債権の問題はそれなりに乗り越え、「改革」の方向性を明確にし、一応経済は再び成長軌道に戻ってきた。それから、日本の安全保障力、防衛力、それから対米関係、これは小泉総理の時代を核として明らかに強まった、いい点だと思います。

アジア関係は、小泉時代の非常に不幸な、靖国神社問題という一点をもって、対話がうまくいかなかった。靖国問題については、私もいろいろ意見があるのですが、それはさておいて、やはり日本の総理と中国の指導部が、リズムカルな対話を、この5年間できなくなってしまったというのは、これは日本外交にとって本当に不幸だった。しかし、その後安倍総理になってから、予期に反してといいますか、懸念した状況は起きないで、中国との対話がもとに戻り、いま、それは福田総理になって続いている。これが、外交の全般的な状況だと思います。他方、いまの日本の内政面はどうか、という点では非常に不安が出てきているというのが大ざっぱな状況では

ないでしょうか。

そこで、彼我の力関係という点でみると、ロシアが大きく伸びてきているのに対して、日本のほうはそれほどでもない。相対的には、向こうの力のほうが強くなってきた。これは否めない。結果として、日本にとって交渉の局面が不利になったということです。

3. 今後の対ロシア政策

それではこれからどうしたらいいか。力関係が不利になってきたということは、いまロシアとの北方領土交渉の機会の窓が開いているというわけではない。開いていると楽観的に申しあげる理由はない。

ただ、それでは、ロシアとの交渉の可能性がいま全くないと我々のほうで判断すべきかということ、それは、そうではないと思います。少なくとも交渉の窓がしまっていると、日本のほうから決めつける、日本のほうから断定することだけはやってはいけません。

プーチン・メドベージェフが強い政権である。北方領土のような問題について、ロシアが何か決定するとしたら、これは弱い政権より強い政権のほうがいい。つまり、これは難しい話であって、国内的にデリバビリー能力のない大統領に領土問題についての決断はできない。ですから、強いということは必ずしも悪くない。

それから、経済の面では先ほど申しあげたように、これから2020年までの対外経済政策で重要な点はハイテクであり、イノベーション型の新しい経済をつくるということだとすると、日本との協力が一つの関心分野になってくる。そういう大きな方向性があるといってもいい。

外交面では、対米、対欧関係での緊張がロシアの政権の目をアジアに向けてきた面がある。そこでは、中国、インドとの関係が安定的に発展しているが、それでは、そういう状況下で、日本の価値がないのかといえ、ないと断定する状況でもない。

もちろん、こういうことがあるからといっ

て、いま機会の窓が大きいとまでは申しません。が、そういう視点というのは念頭に置いておくべきだと思います。

4. 福田政権とメドベージェフ・プーチン政権の今後

そこで、最後に結論です。福田総理が出てこられてから、日ロの交渉の際に、それぞれが何と発表しているか。ラヴロフ外務大臣が10月に日本に来て、12月に森総理がモスクワに行かれてプーチンと会った。年が明けて4月に高村外務大臣がロシアを訪問した。そして今回、福田総理がロシアに行かれた。その際の両方の政府の発表の内容をみてみますと、ずうっと共通していい始めたのが、「双方に受け入れ可能な解決策を探る」という言い方のようにみえるのです。対外的に発表されたものの中に、少なくとも日本のほうには、意識的にこの点を出しているように見えます。

ロシア側のほうも、例えば「二島こっさり」だとか、「二島しかないよ」とか、あるいは「戦後の現実には尊重されるべきだ」とか、日本側が聞くと、「交渉を始める前からロシアは戸を立ててきたな」と、というような言い方はしていない。「双方受け入れ可能」という言い方は、人によっていろいろとり方はあると思います。けれども、交渉というものが合意によって最終的に成り立つ以上、この言い方は、見方によっては決して悪い言い方ではない。交渉を壊さないような、少なくとも交渉が始められるような一種の雰囲気づくりの発言とも受け止められる。

今回、イルクーツクの近辺で日ロの共同で探鉱をやろうと合意した。新聞に随分大きく出ましたけれども、たしか5年間で1億ドルの共同探鉱ということで、石油の共同採掘などにかかる巨大なお金から考えると本当に小さな額です。しかし、象徴的にいえば、日本とロシアがシベリアにおける資源を一緒に採掘するプロジェクトを始めること自体決して悪くない。

こういう努力をしながら、今後話をしていくという余地はなくなはないかもしれない。

ただそのときに一つだけ私が申しあげたいのは、日本のほうから福田政権がロシアと話をしようと、本当に領土を動かすべく話をしようと思ったときのロジックの立て方です。

メドベージェフが全く別の考え方をして新しい動きに出てくれば、そのときは考えなくてはいけないかもしれないけれども、それは当面予見しにくいわけです。当面予想される、プーチン・メドベージェフというタンドムのもとで、例えばこれがこれから12年間続くとして、プーチンが一度考え始めたイルクーツクの考え方、つまり「歯舞、色丹は決まっていますね。でも、それだけではおさまりませんよ。国後、択捉どうするんですか」という日本側の問いかけに答えていこうというアプローチをもう一度プーチンから引き出す以外に、多分方向はないと思うのです。たぶん、人間が考えることに、そう大きな変化というか、ぶれは期待しにくいと思うのです。

その意味で、ちょっと、おもしろいなと思ったことがあります。去年の12月に森総理がプーチン大統領と会ったときに、その後の報道によると、森総理がプーチン大統領に「イルクーツクに戻ろうよ」といって、プーチンが「そうだね」といった、と。それに加えてもう一つ、当時ロシュコフが次官だった。ロシュコフがこのことについて聞かれたときに、「イルクーツクでのアプローチというのは、よく知られているアプローチである。そのアプローチは、カバンの中に入っている」と答えた。これは私が知る限り、日本の新聞で報道したのは一紙だけなのですけれども、「カバンの中に入っている」と。これはおもしろい言い方です。そう簡単にいえることではない。

残念ながら、そのロシュコフはことしの春に次官をやめてしまった。本当に残念です。ロシュコフが相手であれば、イルクーツクに至る論理のプロセスが何もいわなくてもわかるわけです。しかし、彼の後任者で来る人がわかるかという、そこは不明です。

そうすると、結局、いま外務省で交渉している人たち、あるいはその周辺の人たちが、いかなるメッセージをロシアに対して出せる

か。そのための汗をかけるかというところが、これからの焦点になってくる。

しかし、仮にそういう交渉がみんなある程度うまくいったと仮定して、最後に、では交渉はうまく合意に至るか。そこで、多分、最大の問題は日本の内政、福田政権というものが強い政権としてちゃんとこの問題を仕切れるか、あるいは仕切れるとロシアがみるか、多分ここが最大の問題だと思います。

そこは皆さんのほうがご存じのことではありますが、いまの日本の内政状況、ねじれの状況と、それからその後のいろんな政権の対応の中で、そういう印象というのはあまり出てきていないかもしれない。そうすると、この政権を相手に勝負するのかね、という感じはどうしてもロシア側に出てくる。そうすると、2001年にあったように、とにかくロシアも何かしようというところに出てくることはないかもしれない。そうすると、雰囲気がいけれども、何も起きないということになってしまう。

最大の判断の分かれ目は、日本の内政の問題とそれに対するロシアの見方ではないかと思えます。

< 質疑応答 >

司会（宮田謙一企画委員 朝日論説副主幹） どうもありがとうございました。本に書いてあることを踏まえて、今後どうなるのかという話で、率直なご意見をうかがうことができて、大変勉強になりました。

質問 最初のところで、肝心なときに日本側が引いたというお話があったんですけれども、91、92年に引いたというのはわかるのですが、97、98ですか、それから2000年、2001年に日本側のほうから、大事な局面で引いたというのをもうちょっと説明していただけないでしょうか。

東郷 私が引いたということを申しあげたときに念頭にあったのは、2000年から2001年のところですよ。正確にいうと97年、98年のときも、川奈提案を出した後の日本のフォローの仕方には、もうちょっと別なやり方もあったのではないかなという点があります。けれども、しかし、引いたという言い方は適当ではないでしょう。

2000年、2001年は、いま申しあげたように、2001年の4月にロシュコフが「交渉は続く。ただし、あと3週間ちょっとで次のラウンドが開けるといふ速度は無理ですよ」といった。が、そのテンポでの交渉が始まることはなかった。それは小泉総理が来られて、田中眞紀子外務大臣が出て、その後の1年の対ロ政策の立て方、それから最後にはイルクーツク方式から日本が撤退しているとしか受け取れないようなことが起きた、そこに原因がある。やっぱり日本が引いた、ということだと思います。

司会 関連するんですが、ロシアと、とりわけ領土のような難しい問題を交渉する場合に、日本側の内政ということをお東郷さん指摘されました。つまり、政治の意思という問題だと思うんですね。いまの福田政権にその政治の意思があるのか、あるいはそれを実現できるだけの政治基盤があるのかという問題だろうと思います。

東郷さんがおやりになっていた00年、01年の「並行協議」、これは“東郷イニシアチブ”といってもいいのかもしれませんが、イルクーツク以降、ここがうまく追及できなかったのは、やはり当時の森政権の、政治の意思はあったのかもしれませんが、それを実現する基盤がなかった、ということかなあという気がするんですね。

外交をやっておられる方が好きな政権を選ぶわけにはいかないの、時の政権のもとで進めていかなければいけない。時の政権担当者のみならず、与党の実力者とか、あるいは世論とかを引きつける努力をしないと、なかなか理想的な政権ばかりじゃないぞ、とい

う気もするんですけれども、その辺でどうい
うご反省があるでしょうか。

東郷 全くおっしゃるとおりです。外務省
で交渉している場合には、政権は選べない。
けれども、何か実現しようとした場合には、
相手国を説得すると同時に、日本の国内をか
ためないといい結果が出ない。いま振り返っ
てみて、イルクーツクに向けて立てていった
対ロ政策は、あの時点であれしかなかったと
確信しているんですが、他方、その後壊れて
いったのは、やっぱり私がまだ交渉の責任者
をやっておりましたときの内政のいろんな展
開、それから私が交渉を離れてから後、私が
いた間にあったことがその後どういう影響
を与えていったか、というところに、大きな
問題があったわけです。ほんとに慚愧に耐え
ない。思えばあのときもうちょっとその
ところに、こういう手を打てばよかったなあ
という点はもちろんあります。

いずれにせよ、結局、内政を乗り越えられ
なかった。2000年の末から国内は雰囲気がお
かしくなった。ただ、少なくともいろんな局
面で、例えば安保研の方々と話をしたり、霞
クラブの記者にブリーフしたり、論説の方
には、こちらから機会をつくって、ロシアが動
き始めたんだぞと話はした。しかし、日本の
国内には全くそういうメッセージは浸透しな
かった。ロシアが動き始めたかもしれないか
ら、いま、日本がそれに即応しなかったら、
本当に大きな機会を失するぞということは、
私の能力のすべてをかけて2000年の末から
説明はした。けれども、結果においては、こ
れは通らなかつた。通らなかつたのは、やは
り不徳のいたすところであります。本当に残
念だと思います。

それでも森総理がおられた間は、交渉は、
さっきいったところまで進んだわけです。し
かし、その後起きたことは、これまた予想せ
ざることであった。私の思いにもかかわら
ず、田中大臣は全く、内容的にも気持ちのう
えでも、私の交渉の方法を採用してくださ
らなかつた。率直に申しあげて、小泉総理に、この

問題に対する大きな関心があったとは、思
えません。誤解かもしれませんが。

その結果、ロシア側はずっとテーブルの前
で待っていたにもかかわらず、日本側が消
えてしまったというか、崩れてしまったとい
うことが起きてしまった。そういう意味では、
私が欧亜局長をやめてから後、起きたこと
の遠因は、私の時代にあったいろんな国内
の難しい状況にあったわけで、大変残念
です。

司会 多分、この問題は世論と外交とい
う大きな問題とつながっている面もある
んですね。東郷さんがおやりになっていた
時代は、そういうことだったわけですが
けれども、これから日本の政治がどうなる
のかということ、ひょっとすると政権交代
が起きるかもしれない。自民党主体から
民主党主体、政界再編もあるかもしれ
ません。こういう大きな政権の異動が起
きるときに、対ロ外交なんてできる
のか。そんな気さえしてくるんですけ
れども、その辺はいかがでしょうか。

東郷 国際情勢の変化は、これまた日本
ではつくり出せないわけです。この領土
問題というのは、日本がロシアから取り
返そうという話です。ですから、国際情
勢の中に裂け目が出てきたときに、内政
の問題はあるかもしれないけれども、そ
こはぜひ挙国一致でそのチャンスをつか
んでほしいと思うのです。

繰り返しますけれども、領土に問題解決
に向けて裂け目ができるというのは、日
本がつくり出すのではなくて、国際情勢
の大きな変化と、ロシアの変化の中か
ら裂け目が出てくるわけです。だから、
外務省で飯を食っているということの
責任は、その裂け目があるかないかを
正確なアンテナを立てて診断し、正確
なことを国民に訴える、政府に訴える。
ここが外務省の責任だと思うのです。外
務省は、そうであるときは死力を尽く
して国内を説得し、政治に影響力を与
えなくてははいけないと私は思います。

けれども、それだけではやっぱりだめ
なので、それを政治が引き取り、国民が
引き取り、

国民が引き取るということは、プレスが引き取って、国内の状況いかにかわらずその状況をつかんでいただきたいと思うのです。

さはさりながら、現実の政治というのは、なかなかそうはいかないのは、私もよくわかります。政権の大きな転換期というのは、一般的に言えば非常に難しいと思う。ただ、それでは、そういう裂け目があるということが仮にアンテナの中に入ってきたときに、本当に裂け目があるならば、その政権が動く可能性も全くなくはないと思うのです。

100点を取れば、四島一括で返ってくればいいけれども、そうでない場合にはそれなりのリスクを伴うでしょう。しかし、60年、何も動かなかった。実際動かなかったわけですね。それを実際に動かせる、これだけのものが出てきますという可能性が出てきたときに、国民がそれをどう受けとめるか、ポジティブに受けとめる可能性もあるかもしれないですね。

質問 日本の立場が比較的弱いとかありましたが外交関係としては、例えば福田さんが解散しない限り、来年6月まで、外国との条約になりますと、衆議院だけでやれるわけです。領土問題でも何かの妥協をしようと思えば、いまの政権の形でもできるわけです。

結局、国後、択捉の話ですが、100%戻ってくるはずはないんです。日本がどのような妥協提案を考えるかポイントだと思うのです。日本の政界の中で非公式にせよ、そういう可能性もあったのか。いまもあるのか。例えば国後は日本で、択捉はロシアのままとか、何かの妥協点をつくらないと、出てくるはずはないわけです。

ドイツの場合もあったのです。ブランド政権は、当時のソ連とポーランドの修復で大きな犠牲を払った。これは国会で、2~3票差だけで条約を認めてもらったわけです。その20年後、統一のときに、最終的に反対だった保守派もコール首相も了承した。だから、何か日本側からの妥協提案がないと、あと100年も同じお話を聞かなければだめだということ

になるのではないか。

東郷 核心に迫る質問をしていただきました。ぜひ正確にご理解いただきたいんですけども、私が欧亜局長をやっていたときは、さっき申しあげたように、並行協議を提案するところまでだったんです。歯舞、色丹は日本ですね。国後、択捉は、日本は返せ、ロシアは返さないといって全く対立しているわけだから、その対立をほぐすべく、国後、択捉をどうするかということについて話をしよう。これが並行協議の発想です。その並行協議を始めようかなと、ロシアがそこに何とか近づいてきて、プーチンは「ノー」といわず、ロシュコフは、そういう考え方には理由があるといって、その協議が始まるか、始まるまいかという、その接点に来たところで終わってしまったんです。

これはもう誓って申しあげますけれども、そのときにはいまおっしゃった国後、択捉についてどうしたらいいかということについて、外務省の中で議論はしました。けれども、外務省として対処方針を立てたことはありません。これはありません。よく先行返還といいますけれども、先行返還という形で、これだこうと外務省で決めたことはありません。本当にあのとき、マスコミにいろいろ書かれましたけれども、議論は若干したけれども、一度も決めていないのです。

したがって、もしも交渉が私がやっていたときのテンポで続けられていたら、まずやらなくてはいけなかったのは、国後、択捉について基本論から話を始める。ロシアは嫌だという。嫌だというのであれば、どうするの、何かしないと解決にはならないよといって。私の心づもりとしては、いま「日本が出さなくてはいけない」とおっしゃいましたけれども、日本からはなかなか出しにくいのです。しかし、ロシアのほうから、交渉の中で案がでてくるような話し合いはできないか。公式交渉だけでなく、相手の交渉者との一種の腹の探り合いですよね。

そのとき私の頭の中で、だれにもいって

ないいくつかのアイデアはありました。でも、それは残念だけれどもきょうも申しあげられない。

でも、おっしゃる意味はわかります。そのところをほぐさないと、次のところに行けないというのはそのとおりなんです。あるいはもう一つ、“あうんの呼吸”というのがあるかもしれません。しかし、そこは、これは本当に交渉の核にある人の腹の問題になってくると思うんです。ロシュコフにしても私にしても、国の立場があるわけです。それを乗り越えて、公式の提案はできないわけです、絶対に。さればとって、交渉の、それぞれの立場をそのままぶつけてやっているだけで、話が進むのかということ、そうでもないわけです。

答えになっているかいないかわかりませんが、でも、私は、本当に交渉が動くときには、どこかでそういう局面がくると思います。そのときには、外務省で仕事をしている立場からいけば、これは一生に1回の本当に命をかけた仕事になるわけです。だから、それをエンジョイするか、それとも恐がるかという、あとは人間の生き方の問題になってくる。

質問 領土問題ですから二国間でやるのが一番大事なことだし、それでなきゃ進まないだろうと思います。しかし、二国間でなかなか進まないということになれば、他国の力をかりるといことも必要なのじゃないか。

例えばロシアをサミットに入れるとき、あのとき、なぜ日本は平和条約を結んでいない国を入れたくないんだ、まずそっちが先決なんだと、アメリカほかのサミット参加国の応援を得て、それをやらなかったのかある外務省の幹部に後で聞きましたら、あれはアメリカが入れると行ったからしょうがないんだという、何か自主性があるのかないのかわからないような話をしていました。

サミット参加国というのは、日本とロシアの領土問題に、どの程度関心を持っているのか。また、どのような支援の姿勢をとっているのか。

東郷 まず、ロシアをサミットに入れたときに起きたことです。あのときは橋本総理でした。クリントンから橋本総理に直接電話が入ってきて、NATOの東方拡大と絡んでいたんです。それで、ある意味でNATOの東方拡大をのませるために、ロシアをサミットに入れたいけどどうかとって来た。そのときに、これは私が直接橋本総理から聞いたわけではないんですが、その後、総理がいろいろいっておられることをみると、総理は基本的にはOKです、と。ただし、2つある。1つは、経済問題の核のところは、ロシアはとて無理なので、これはもうG7でやりますよ、と。もう一つは、まさにおっしゃられた領土問題です。領土問題について、自分は本当に真剣にやりたい、これからやるんだ、ということクリントンからエリツィンにちゃんと伝えてくれ、と。総理はその後、コールにも同じことをいわれた。コールからもそのメッセージがエリツィンに入り、クリントンもそれをエリツィンに伝えた。

ですから、いまおっしゃられたように条件として平和条約をつくるという言い方はされなかったけれども、少なくともアメリカとドイツを使ってエリツィンに領土問題をちゃんとやれというメッセージを伝えた。あれは1997年の春です。エリツィンにそれが伝わって、それが経済同友会での演説になって、それが97年の11月のクラスノヤルスクにおけるエリツィン発言「今世紀中に解決しましょう」につながっていったわけです。

ですから、僕は、橋本総理はそれなりに立派にやられたというふうに理解しております。

なお、もうちょっと長いスパンで考えると、領土問題には実に密接にアメリカが絡んでいるわけです。だから、私もずうっとやっている中で、どこかでアメリカの力をうまくこの問題に入れるというオプションはないかとずうっと思っていました。根っこは二国間交渉で、その二国間交渉を進めながら、どこかで決定的なところでアメリカに入ってもらい、ということではないかなと思っていました。しかし、私のときはついにその機会が来なか

った。イルクーツクの後、国後、択捉について、ある種の感じが出てきたときに、アメリカにプッシュしてもらって、イメージとしてはそういうようなことかなとも思いますが、解りません。

それはやはりアメリカに責任の半分があると思うのです。そもそもこの話はヤルタから始まっているわけです。あるいはもっといえば、ヤルタと、それから大西洋憲章、カイロ宣言との間の矛盾から始まっているわけです。そこは絶対にアメリカの役割があるわけです。

ロシアからみると、千島を占領したことで日本からガンガンいわれるけれども、それは割に合わないということになる。もともとヤルタでお墨つきをもらっている話なのだから、と。こういう部分がどうしてもあるわけです。

戦後のいろんな交渉の動きをみても、そのことを我々はアメリカに対してははっきりと物を申して、日米の問題にしたことはないのです。それはいろんな長い戦後の日米関係で、その中で日本がアメリカから得てきたものは何か、そういう大きな国益の中で動いてきたことだと思えます。

けれども、この領土問題を考えるに当たっては、原点としては、そのところから逃れるわけにはいかない。やっぱり最終解決の前には、もう一回、あのおとしまえを、ロシアからではなくて、アメリカからとらなくてはいけないのではないかと、という思いはずうっとあった。それは実現しなかったかもしれないし、なによりも、交渉は、そこまでいかなかったということです。

質問 いろいろ複雑な問題があるから、ほかの国の領土問題の解決の仕方が参考になるかどうかはわかりませんが、中国とロシアの間で国境問題の解決をしたと聞いております。そのほか、フィンランドとロシアの関係でも、領土問題があったと思えますが。その辺でどんな交渉がされたかというのは、勉強されておられるんでしょうかということですか。

東郷 中国とロシアの話は、大きく動いたのは、私が外務省をやめた後です。でも、関心をもって、岩下先生の書かれた本を読ませていただいて、私なりにできるだけ勉強するようにしました。

中ソ関係、中ロ関係というのは、対立している時点では、イデオロギーの対立、歴史的な領土の取り合いの対立、地政学的な対立、それから安全保障の面での対立、経済面の対立、指導者間の個人的な対立と、あらゆる対立があったわけです。

ところが、ゴルバチョフの89年の北京訪問以降、ゴルバチョフの最後のとき、ソ連邦の崩壊、それからエリツィンになってから、特にプーチンになってから、そういう国家間の対立というのをできる限り解決し、中ロの協力を強調するという方向に動いてきた。その中で、領土問題がどう扱われたかということ、結局、まず、できる限り目立たせない、できる限りマスコミにいわない。その中で、できる限りプラグマティックに解決する、ということをやったように見えるのです。

例えば、当時のハバロフスクの知事などの動きによって、ハバロフスクの近辺の島の扱い、その他幾つかの重要な点で、ロシアの国内問題になってしまった。けれども、それをできる限りおさえて、事態を政治的にインフレートさせないで決めていく、ということがロシアにもあった。ましてや中国のほうは、そういう意味ではずっと全体主義ですから、中国のほうにもそういう態度があって、大ざっぱに言って、面積を半々で割るというアプローチに入っていたわけです。

そもそも、歴史にさかのぼると、中国側としては、北京条約、愛軍条約のときから、本来の中国領をロシアが取ってしまった、こういう不満がある。そういう大きな背景の最後のしめくくりの交渉の中で、お互いにそういう歴史的な怨念の話をいわないで、プラグマティックな仕切りで解決しようとした。

我が北方領土の問題の本当の難しさというのは、日本が要求しているのは、まさに19

45年8月に、ロシアが日本に対してやったことに対する民族の心の傷がある。これは領土問題だけではない。有効であった日ソ中立条約をロシアが破って入ってきた。それから、日本の兵隊を収容所に入れただけではなく、あのと時の満洲とロシア占領地域の朝鮮における日本人及び日本の婦女子に対する、ロシアの扱いというものを絶対に許せない部分があるわけです。

最後に、カイロ宣言からみても、大西洋憲章からみても、ロシアに権利の生ずるはずのない1875年千島樺太交換条約によって取得した千島を取り、それに加えて1855年平和裏に確定した四島まで取ってしまった。その民族の怒りというのが、これは立場によっていろいろ違うかもしれないけれども、少なくとも外務省でこの問題をやるときに出てくる原点というのはそこにあるわけです。だから、正義の問題と切り離しにくいわけです。

中国はあの体制のもとで、そここのところを全部ふたをして、半々という実務的な処理をした。恨みの根っこは、私は中国のほうが深いと思うのですが。そういう歴史的な経過は、あの体制のもとで押さえ込んで合意に至った。

しかし、我が日本は、その恨みの問題を全く除去してプラグマティックにやれるか。そういうわけにはいかない。にもかかわらず、ある種のプラグマティズムを持ってやらないと、領土問題にはなかなか接点が出てこない。そこに物すごく大きな矛盾を抱えて交渉してきたわけです。

けれども、私はその交渉をやっていたときには、とにかく現実に島の状況を変えるということが、この領土問題に関しては最も重要だと思うようになりました。つまり、怨念の問題、正義の問題があるから、四島が返ってくるまで日本は頑張り続けるんだというのは、私はある段階から無理があると本当に思い始めた。もちろん四島が返ってくるのが最終目的で、そこから退却したことは一度もないけれども、しかし、現実に島の現実を変えないとその目標に近づかないということは、だん

だん骨身にしみて思い始めたわけです。

そういうふうにしていくためには、最初の怨念の問題は、それなりに自分の中でもある程度コントロールし、国民的にもある程度コントロールし、マスコミ的にもある程度コントロールしていただいて、実際の領土のあり方というのを変えていくようにしていかないと。これは国内問題として物すごく難しいのです。難しいけれども、そういう方向でやっていかないと、日ロのとげというのは抜けないし、この問題のとげを抜かないのは、最終的には日本の国益にならないと思うようになったわけです。

質問 ロシア人はかつて会談などでこういうことをいったのです。こんなにガタガタになって、ロシア自体が統一を保てるかどうか分からないような時期に、領土返還要求を突きつけないでくれ、そんなことをすれば、何と冷たい国だと思われるだけだ、と。ところで、いまや国内は随分強くなって、安定して、ゆとりを持ってよさそうなものだけでも、どうも世論的には決して簡単ではなさそうだと、思うんですね。

それから、10年ほど前ですけれども、国後と色丹の住民などと話したことがあります。特に色丹では、いつ日本に戻ったって構わないというぐらい、中央から見放されたという気持ちが強かったと思うんです。けれども、これもプーチン政権下で随分変わってきているのかもしれませんが。世論はやはり、依然として強い安定度を持つロシア政権になっても大きな障害なのではないでしょうか。

東郷 いまおっしゃられた両方の点ですね、まさに領土をどうやって扱うかという点では非常に重要な点だと私も思います。

まず、ロシア側が、「いまおれたちのほうでガタガタになっているから、いまはちょっと勘弁してくれ」ということをいった時期というのは何回かあります。

ロシアは要するに返したくないということをするためにいろんな言い方をしてきたわ

けですが、しかし、それはさておいて、本当にいまは勘弁してくれということを私が一番強く聞いたのは、最後の3回目のモスクワ勤務のときです。つまりエリツィン政権の後半、エリツィンが政権を握ったけれども、国内的基盤が非常に弱い、ロシアの経済は大混乱。96年の次の選挙にこれから入っていく、次の選挙はどうしても勝たなくてははいけない。その状況で、島の問題についてはいま決断はできないよ、ということをしていった時期です。私はそのとき、モスクワで2年半勤務していたんですけども、このとき私は、ロシア側がいていたことは、それなりに真実であるなと思ったんです。

つまり、ロシアでいろいろな人と話をしていると、本当にいま、領土問題をエリツィンにやらせるというには、国内的に大きなプレッシャーがかかる。橋本総理が、96年春、原子力サミットをロシアが開催して、それでロシアに行ってエリツィンに会ったときも、「いずれ自分領土をやりたい、しかし、いまはやらないよ、だから、あなた、選挙でちゃんと勝って、そのときやろうね」、というメッセージを出した。これはその後の橋本・エリツィン交渉に関して非常にプラスになったわけです。

したがって、私がさっき申しあげましたように、政権が安定してきて、ある程度統御能力を持ったときに、より大きなチャンスが出てくるということは、ある意味では正しいと思うんです。しかし、逆にいうと、安定して強くなったら必ず領土をやるかという、これまた、そういうわけでもないわけです。その安定した政権が領土をやることにメリットがあると思うかどうかにかかるとは思います。

だから、安定しているか、安定していないかということだけで考えれば、安定して強い政権というのは、これは悪くない。むしろ、本当に弱くるとき、押せばつぶれるような政権とはディールはできない。そうなんですけれども、しかし、安定したら必ず先方から出てくるかという、全然そんな保証はないわけです。ですから、そのときに安定して強いと

いうことは、マイナスなファクターじゃないんだということ認識したうえで、そのときのいろんな施策の中で領土を動かすべきだと思います。ここ1~2年の交渉でけりをつけることがプラスだ、そういう状況だったと彼らがいろんなファクターの中で思うか、あるいは思わせることができるか、というところにかかってくるわけだと思います。

それから2番目の話は、これは本当に私もそう思いました。つまり私がやっていたところというのは、基本的にはロシアに経済力がない。北方四島に向かって多量の金を流しにくい。全体が貧しいわけですから。その状況の中で、当時私どもが外務省の中でもいって、ある程度新聞にも出たのは、「日本化」という考え方でした。

北方領土に今住んでいるロシア人と友達になる、彼らが困っていることに、耳を傾ける、北方領土に住んでいる人たちが「いや、日本はいい国だ。自分たちの友達だ」更には「自分たちの生活のためには、北方領土が日本に返ってもいいじゃないか」という世論がそこに住むロシア人の中から自然と出てくる。これが「日本化」ということであり、そういう形で北方領土の世論を変えていくほうが日本にとっていいんじゃないか。そういうことに当面力を注いだらという、ロシアの知日派もいたし、それから、そういう考え方で本当に動いたのは鈴木宗男先生でした。

その点で鈴木宗男先生が動いた内容というのは半端なものではなかったと思います。自分の北海道の選挙区と同じような感じで北方領土に行ったわけです。住民に感ずるものがあるわけです。私は1回しか行っていませんが、その後、私が外務省から排除されたとき、マスコミで、繰り返し繰り返し映像を流されましたが、「ムネオハウス」と揶揄された住民センターの開所式に同席しました。そのとき私は鈴木議員が北方領土のロシア人の住民に与えている印象というのは半端なものではない、「おらが先生が来た」といって、みんな陳情に来ているなあと思いました。

そういう日本の政治家が数人でもいれば、

あの当時のロシアの国力、ロシアの状況であれば、それは北方四島の住人の雰囲気というのはさらに変わったと思います。

ところが、その後何が起きたか。その後のこの8年間の空白で何が起きたかという、日本側は、そういう「日本化」路線を、みずから壊してしまった。他方、ロシアは金を持ってしまったわけです。この金は使おうと思えば使える金なんです。私が一番最近ショックを受けたのはチェチェンの首都グロズヌイですね。これは私がロシアにいたころから、それからプーチンがやったチェチェン撃滅作戦で、本当に廃墟と化したわけです。どこをみても瓦礫の山しかないようになってしまった。

ところが、1年ぐらい前のニューヨークタイムズの記事で、グロズヌイに記者が入って、いまのグロズヌイの記事と写真を見て、仰天しました。全く再興してしまいました。本当にきれいなまちになった。それを1年か2年でやってしまったわけです。それだけの資金力がロシアについてしまった。

逆にいうと、国後、択捉、色丹の3つの島に、重点的に金を注ぎ込めば、これらの島は全く変わります。やろうと思えばできる。

当時、外務省で議論していたときに、日本化論とペンペンサ論というのがありました。日本化論というのは、いずれロシアは力をつける。そのときには、ロシアは北方四島に本格的に投資する。投資したら、島民は、もう日本なんかに関心がなくなる。その前に北方四島に対して、我々は手を打たなくてはいかんというのが日本化論。

ペンペンサ論というのは、ロシアは弱っている。金なんかついてくるはずがない。だから、四島にペンペンサを生やさせておく。そういう状態にしておくことが、一番日本のレベレジが高まってくる、というものでした。ロシアを知らないことは恐ろしい。なんという傲慢な議論だと思いました。

だから、非常に危機的なのは、この8年間に、そうやって現実に起き始めた北方四島における変化、それから、あっという間に変わ

るかもしれないそういう状況、交渉はそういう局面に追い詰められているかもしれないということだと思います。

質問 ずうっとライフワークとして、ソ連、ロシアと交渉してこられて、きょうの心境もいかが이었습니다。ところで、外務省の後輩たち、一生を対口交渉にかけようという意欲のある若者が、普通、冷静に考えたら嫌になってくるんじゃないかと思うんですよ。今日のお話からしましても、それに一生をかけるというのは。いっそのことなら、チャイナスクールとかアメリカンスクールに入ったほうが得だというふうに考えないのだろうか。その辺の、後輩について少し語ってください。

東郷 これから私の申しあげる私の情報源は限られています。全部の外務省の最近の若い人と話したわけでもないの。けれども、私の接触した、限られた範囲の外務省の若手、いままだ首席事務官にもなっていないような人たちの間で時々聞く話は、やっぱり外務省で仕事をする以上は、ちゃんと意味のある仕事をしなくてはうそだというものです。ロシアに関していえば、客観的条件が非常に苦しくても、その中から可能性を見出して頑張る。頑張る以上は、毎日6時か7時に家に帰ることはできないかもしれない。夜中の12時、1時まで仕事をしなくてはいけないかもしれない。けれども、やっぱりすべきときにそういう仕事をしなければうそだ、というような話をしている、という話を何人かの若い人から聞きます。それは非常にうれしいことです。

そういう意味では、決して希望を捨ててはいけないと思います。ただ、申しあげましたように国際情勢の変化というのは、大きくいえば領土問題に関しては日本に対して不利になってきていると思います。きょう、まだ申しあげられない部分も幾つかありますけれども、冷戦の終了、この大きな機会、その中で結局解決の機を逸したわけです。一部分に関しては、私個人にも責任があると思います。2001年のときは、もうここで失敗はできない

と思ったのですが、そこでまた失敗してしま
った。これを背負ってこれから交渉しなくて
はいけないのは、本当に大変だし、申しわけ
ないと思う。さればとって、交渉しないの
かといえば、そういうことではないはずだ。
頑張っしてほしいということに尽きますね。

司会 どうもありがとうございました。

きょうはおそらく東郷さん、日本に帰って
こられて初めてのこういう形での話というこ
とだったろうと思います。古くからの友人の
方もいらっしゃると思いますが、東郷さんの
以前に変わらない、熱っぽく、元気のよいお
話を聞けて、大変うれしく思いました。き
ょうはどうもありがとうございました。

(文書・編集部)

東郷和彦氏(とうごう・かずひこ) 元
外務省欧亜局長、テンプル大学ジャパ
ンキャンパス客員教授

1968年外務省入省。3回の在モスクワ
大使館勤務のほかソ連課長、欧亜局長
など計17年間にわたり対ソ連・ロシア
関係を担当。その他、条約局、在米大
使館などを経てオランダ大使を務め、
2002年退官。その後、ライデン大学、
プリンストン大学、淡江大学(台湾)
などで教鞭をとる。著書に『日本外交
1945～2003』など。